

韓国における夏季短期研修プログラムの実践報告Ⅱ¹

——学生フィードバックを基盤としたプログラム改善と企業訪問の導入効果——

林 河運

1. はじめに

近年、大学教育において短期海外研修の価値が改めて注目されている。グローバル化が進む今日、大学生が異文化に直接触れ、外国語学習を社会理解へと結びつける学習機会の重要性は一段と増している。短期研修は語学面の伸長に加え、学習者の視野拡大や将来設計にも影響し得ることが指摘されてきた。実際、留学生交流支援制度（短期派遣・ショートビジット）の追加アンケートを分析した野水・新田（2014）は、参加者が語学面だけでなく、異文化理解、視点の広がり、進路・就職意識など多方面で効果を自覚していることを報告している。なかでも、7割以上が「異文化理解が深まった」「日本では得られない視点を得た」と回答した点は、短期研修が学習者の認識や態度に変化をもたらし得ることを示す。加えて、佐藤（2025）は短期語学留学の経験がキャリア意識を高め、将来像の明確化につながる可能性を明らかにした。これらの知見は、短期研修が単なる言語能力の向上にとどまらず、自己理解や進路意識の形成にも関与し得ることを示唆している。とりわけ韓国は日本から近距離に位置し、人的・文化的交流も盛んであるため、短期間でも多面的な学習成果が期待できる研修先として位置づけられる。島根大学では、韓国外国語大学（Hankuk University of Foreign Studies）と連携し、毎年夏季に短期研修プログラムを実施してきた。本プログラムは、韓国語授業、文化体験、現地大学生との交流、自主研修を柱とし、語学力の向上に加えて、異文化理解の深化および学生の主体性育成を目的として運営している。昨年度（令和6年度）の研修について、筆者は『島根大学外国語教育センタージャーナル』に実践報告を行った（林, 2025）。その結果、参加学生の満足度は概ね高い一方で、教育効果をさらに高めるための課題も確認された。具体的には、①現地大学生との交流機会の拡充、②文化体験活動の選択肢の多様化に関する要望が多く示された。これらの意見は、研修経験をより深い学びとして位置づけたいという学生の意識を示す資料として捉えられる。そこで本年度（令和7年度）は、これらのフィードバックを踏まえ、交流活動の拡充と文化体験の再設計を行った。さらに筆者は従来より、研修の学びを「語学と文化」にとどめず、韓国社会や企業の実情に触れる学習機会を加えることが有効であると考えていた。本年度は、島根県出雲市に業務で滞在していたNAVER本社社員を紹介してもらう機会を得て、メールでの調整を経たうえで、韓国のNAVER本社を訪問することが可能となった。これにより、プログラム全体を再構成し、企業訪問を新たな学習要素として組み込んだ研修を実施した。本稿では、昨年度の課題分析を踏まえつつ、令和7年度研修の内

¹ 昨年度の夏季研修については、筆者が実践報告としてすでに詳細を示している（林, 2025）。本稿で扱う令和7年度研修のうち、昨年度の実施内容と重複する部分については、紙幅の制約を踏まえ、説明を必要最小限にとどめる。代わりに本稿では、昨年度からの変更点および新たに追加した取り組みを中心に記述する。

容を報告し、①事前交流を含む交流活動の拡充、②文化体験の多様化、③NAVER 企業訪問の導入が、学生の学習経験に与えた影響を検討する。とりわけ企業訪問については、学生のキャリア意識の形成やグローバルな視点の獲得に関わる可能性がある点から重要であり、その教育的効果を分析することを本稿の主要な目的の一つとする。以上の検討が、短期海外研修の企画・運営および異文化教育に関わる実践に対して、一定の示唆を提供することを期待したい。

2. 研修プログラムの構築と改善方針

本年度のプログラム改善は、昨年度の学生フィードバックを基盤とし、教育的効果の最大化を目指して体系的に行われた。本章では、改善の背景と基本方針を整理し、本年度の再設計がどのような意図のもとで行われたのかを示す。

2.1 改善の背景

昨年度の研修では、韓国語授業および文化体験に対する参加学生の満足度が高く、プログラム全体として一定の完成度は確保されていた。しかし、アンケートの自由記述や振り返りコメントの分析からは、教育的効果をさらに高めるために改善すべき点が複数確認された。

第一に、現地大学生との交流時間が十分でなかった点である。学生は会話機会の拡充を求めており、交流活動は「イベント」ではなく、学習者が自分の韓国語を実際に使い、相手の発話を理解しながら応答する経験を通して学びを定着させる場として位置づけられる。また、同年代の大学生との対話は、言語面に加え、価値観や生活理解の面にも波及し得る。したがって交流時間の制約は、学習の深まりに影響する課題であった。

第二に、文化体験活動の内容が十分に多様ではなかった点である。昨年度のアンケートでは、伝統工芸に触れたいという意見が複数寄せられた。筆者としても、令和5年度以降に人気が高まっていた伝統楽器体験をプログラムに取り入れることを検討していたが、実施先の予約が確保できず、急遽別の内容に変更せざるを得なかった。この経験を踏まえ、本年度は、昨年度に好評であったK-POP ダンス体験および韓国料理体験に加えて、伝統工芸体験と伝統衣装の試着体験を新たに組み込み、文化体験の幅を広げた。文化体験は、視覚・触覚・身体感覚を伴う活動であるため記憶に残りやすく、異文化理解を促す機会にもなり得る。一方で、体験内容が限定されると学びの入口が一方になり、学生の多様な関心に十分応えられない可能性がある。

第三に、社会理解・職業理解に関する学習機会が十分ではなかった点である。この点は、筆者が以前から研修に取り入れたいと考えてきた要素でもあり、本年度のプログラム再設計において重要な示唆となった。すなわち、本研修は「語学と文化」を学ぶ場にとどまらず、学習者が社会の仕組みや働くことの意味についても視野を広げ、捉え直す契機となり得ると考えられる。

以上の学生の要望および教員側の課題認識からは、学習者の関心が、体験を「楽しかった」で終える段階から、体験を通して得た情報や気づきを手がかりに社会や世界をより深く理解しようとする段階へ移りつつあることがうかがえる。したがって、プログラム改善にあたっては活動数の増減のみに注目するのではなく、各活動のねらいを明確にし、学習過程を「準備→体験→振り返り」として整理できるよう、全体を構造化する必要がある。

2.2 改善の基本方針

上記の背景を踏まえ、本年度は次の三点を重点的な改善目標として設定した。

(1) 交流活動の拡充と「学びとしての交流」への転換

交流は回数を増やすだけでなく、渡韓前から準備を進め、対面交流を目的意識のある対話へつなげることを重視した。具体的には、研修参加学生 15 名と協力学生 4 名について、渡韓前にグループ編成を確定し、SNS 上でプロフィールや関心事項を共有する事前交流を行った。現地では、各グループ（4～5 名、協力学生 1 名を含む）で交流活動を合計 4 回実施し、事前交流で共有した話題や興味関心を手がかりに、活動内容を組み立てられるようにした。

(2) 文化体験の選択肢拡大

文化体験は、現代文化と伝統文化の双方に触れられるよう構成を見直した。昨年度に好評であった K-POP ダンス体験と韓国料理体験は継続し、新たに螺鈿（らでん）のキーホルダー作り体験と、韓服試着体験（景福宮観覧を含む）を導入した。あわせて、説明言語など実施上の条件を踏まえ、手順や注意点を整理した資料を事前に配布し、体験活動が学習として円滑に成立するよう環境を整えた。

(3) 企業訪問（NAVER 本社）の導入

研修の学びを「語学・文化」にとどめず、社会理解へ広げる可能性を検討した結果、NAVER 本社訪問を実施した。企業訪問は当初計画で確定していたものではなく、当初は江華島平和展望台（강화도평화전망대）の見学を予定していた。しかし、北朝鮮からの放射性物質流出に関する報道²を受け、安全面を最優先して当該行程を中止した。その後、島根県出雲市に業務で滞在していた NAVER 本社社員を紹介してもらう機会があり、メールでの調整を経て、急遽 NAVER 本社訪問へ計画を転換した。偶発的な要素はあるものの、研修の学びを社会理解へ接続したいという教員側の構想とも合致し、結果として新たな学習要素を組み込む契機となった。

以上の改善により、本年度の研修は、語学学習中心の構成から一歩進み、交流・文化体験・社会理解を関連づけた多角的な学習構造をもつプログラムへと発展したと考えられる。また本年度は、研修終了後アンケートに加え、研修実施中に参加学生への個別インタビュー

²「[イシュー] 政府、『北朝鮮ウラン工場廃水』関連の合同調査に着手」、『KBS ニュース』、2025 年 7 月 3 日放送（原題：[이슈] 정부, '북한 우라늄 공장 폐수' 관련 합동조사 착수）。

ーを行った。インタビューでは、日程の負担感、移動・宿泊の運営、学習機会の配分、生活面での困りごとなどについて自由に語ってもらい、教員が要点を整理した。以下では、この実施中インタビューから得られた示唆を、来年度以降の改善案としてまとめる。

3. 研修の概要と日程構成

本年度の研修は、昨年度より4日延長し、18泊19日で実施した。研修の構成要素は、①韓国語授業、②文化体験、③交流活動、④企業訪問、⑤訪韓教育旅行団体支援プログラム（NANTA 公演観覧およびロッテワールド体験）、⑥自主研修、⑦事前・事後研修³の七つである。本章では、参加者の属性と日程構成の概要を述べる。

3.1 参加者のプロフィール

参加者は15名で、学部・学年、韓国語学習歴は多岐にわたった。韓国語学習歴が浅い学生と、一定の学習経験を有する学生が混在していたため、研修参加申請時の学習歴調査および現地側のレベル分けを踏まえ、レベル1とレベル2の二クラスに分けて授業を行った。本年度の特徴として、医学部学生が初めて1名参加した点、また男子学生が2名と昨年度より少なかった点が挙げられる。

3.2 研修日程の概要

日程の詳細は紙幅の都合上省略するが、昨年度と比較した主な変更点は以下のとおりである。

- 現地大学生との交流活動：2回 → 4回へ増加（SNSを活用した事前交流「プロフィール交換等」を導入）
- 文化体験の内容：
 - 印鑑づくり → 螺鈿（らでん）のキーホルダー作り体験
 - 伝統茶道体験 → 伝統衣装の試着体験を行い、景福宮を観覧
- 訪韓教育旅行団体支援プログラム：昨年度同様、NANTA 公演観覧＋ロッテワールド体験⁴を実施
- 新規項目：NAVER 本社の企業訪問を追加
- 全体日程：4日延長（18泊19日）

以上のように、本年度は活動を追加するだけでなく、文化体験の内容を見直し、企業訪問を新たに組み込む形でプログラムを再設計した。これにより、語学学習に加えて、交流・文化理解・社会理解の学びの機会を拡充することを重視した。

³ 昨年度と内容は概ね同様であったが、本年度は追加事項として、WOWPASSの利用方法と、韓国へ持ち込みができない風邪薬等（医薬品）に関する注意点を取り上げた。

⁴ 昨年度はNANTA 公演の観覧のみであったのに対し、本年度はこれに加えてロッテワールド体験を初めて導入した。

4. 現地大学生との交流活動の充実

4.1 交流内容の変化

本年度の研修では、現地大学生との交流活動を昨年度の2回から4回へと大幅に増加させた。単に回数を増やすだけでなく、渡韓前からオンラインで交流を開始する試みを導入した点に特徴がある。具体的には、研修参加学生15名と韓国の協力学生4名をあらかじめグループ編成し、SNS上でお互いのプロフィールや興味関心を紹介し合う事前交流を行った。その過程で「訪れたい場所」「話したいテーマ」「共通の趣味」などについて意見交換し、現地での対面交流時にはあらかじめ共有した話題に基づいて行動計画を立てられるように準備した。現地到着後は、各グループ(4～5名編成、うち現地学生1名)毎に合計4回の交流活動を実施し、大学周辺の案内だけでなく、学生同士の関心に応じた多様な交流内容が展開された。例えば、歴史に関心を持つ学生グループは協力学生の案内で伝統的建築物を訪問し、K-POPやアニメが好きなグループは共通の話題で盛り上がりながら繁華街やカフェを巡るなど、事前交流で共有したテーマに沿った活動が行われた。このように、事前準備を通じて現地交流を「目的意識をもった対話の場」へ転換することで、交流活動自体の学習効果を高める工夫を凝らした。

4.2 学生の反応

学生の自由記述からは、現地学生との交流が、韓国語を実際に使う経験の蓄積だけでなく、異文化理解の深化にもつながったことが読み取れる。例えば、ある学生は「韓国語で恋愛トークをする中で現地の若者言葉も出てきて同世代の使う韓国語を知れた。」と述べ、日常的な会話を通して教科書では扱いにくい表現に触れた点を挙げている。また、「部活の種類が韓国と日本で全然ちがって驚いた」「日韓の学生生活について共有しながら、似ている部分や違う部分を発見できたことが面白かったです。」という声からは、学生生活や価値観を比較するなかで、共通点と相違点の両方に気づいた様子がうかがえる。さらに、「日本のアニメの話や韓国の恋愛事情について話したのがとても楽しかったです。お酒も飲んだりしてすごくいい思い出になりました。」という記述は、同世代同士の自然な対話が関係形成を促し、交流体験そのものの充実感につながったことを示している。加えて、交流会初日に地元の飲食店でサムギョブサルを囲んだ経験について、「現地の大学生に本場の食べ方を教えてもらえたことも思い出に残りました。」と振り返る学生もあり、食文化を介した学びが具体的な記憶として残っている。以上を総合すると、交流は単なる会話練習にとどまらず、同年代の他者とやり取りする過程で視点を広げ、自己理解や他者理解を深める機会となったと考えられる。短期研修においても、異文化コミュニケーションが新たな視点の獲得や自己成長(自己効力感・適応力の向上等)につながり得るとする指摘とも合致する(山本・原・北村, 2025)。

5. 文化体験の多様化と教育的効果

5.1 導入した文化体験の概要

本年度は、文化体験プログラムの選択肢を拡大すべく、昨年度に好評だったコンテンツを継続しつつ新規体験を導入した。具体的には、昨年度も実施した K-POP ダンス体験と韓国料理体験に加え、新たに伝統工芸体験（螺鈿のキーホルダー作り）と伝統衣装の試着体験（韓服の着付けと景福宮訪問）を組み込んだ。これにより、現代の大衆文化から韓国の伝統文化・芸術に至るまで幅広い体験機会を提供し、学生が多角的な視点で韓国文化に触れられるよう配慮した。特に螺鈿細工の体験は、昨年度学生から要望の多かった伝統工芸分野への対応であり、印鑑作りに代わる新たな試みとなった。実施に際しては、現地の工芸師が日本語で説明できないため、制作手順や注意点を記した日本語の資料を事前に配布し、言語の壁による戸惑いを軽減する工夫を行った。この準備により、当日は円滑に制作を進めることができ、単なるものづくりに終わらせず学びの機会としての質を確保することができた。

5.2 学生の学びと反応

アンケートの自由記述からは、各文化体験が学生に強い印象と学びを残していることが読み取れる。韓国料理体験では、ある学生が「韓国料理を実際に作ってみることで調味料の違いなどを実感することができ、日本に帰ってからでも習ったことを生かして料理に挑戦できる」と述べており、現地での調理を通じて日本との食文化の違いに気づき、帰国後の実生活に応用しようとする姿勢がうかがえた。また、伝統工芸体験については「日本にキーホルダーを持って帰ることができ、螺鈿について教えてもらいどのような方法で螺鈿が作られているのか紹介してもらえたのが良かった」との声があり、美しい螺鈿細工の制作工程を学びつつ形に残る作品を持ち帰れたことが学生にとって満足感につながったようである。韓服試着体験に関しても好意的な意見が多く、「本格的な韓服を着ることができ、日本の伝統衣装との違いを実感することができた。」という感想にあるように、初めて韓国の伝統衣装に袖を通し、自国の和服との比較から文化の相違を肌で感じた学生もいた。また、「韓服を着て景福宮を訪れたことで韓国の伝統文化や歴史に触れ、また他の外国人旅行者とも交流ができたことが楽しかったです。」との記述からは、伝統衣装で歴史的建造物を訪問する体験が異文化理解のみならず国際的な交流にもつながった様子が窺える。さらに、K-POP ダンス体験については、「韓国で韓国人の方に K-POP ダンスを教えてもらえることは、K-POP が好きな私からするととても貴重な体験だった」と、熱心な K-POP ファンの学生にとって夢のようなプログラムであったことが示唆された。一方で、「K-POP ダンス体験が、最初はダンスが苦手ですごくやりたくなくて憂鬱だったけど、実際に体を動かしてみると楽しかったし、他の友達とさらに仲良くなれたので印象的だった。」と、当初は消極的であった学生が苦手意識を克服して楽しめた例も見られた。こうした共同での挑戦を通じて学生同士の仲間意識も高まり、プログラム参加者間の結束力の向上にも寄与したと考えられる。多様な文化体験プログラムを取り入れたことで、各学生の興味に合った

学びの機会が提供され、身体的な参加を伴う体験活動であるがゆえに記憶にも残りやすく、研修全体の満足度向上に繋がったと評価できる。

6. 企業訪問（NAVER）の導入とキャリア意識の変容

6.1 企業訪問の目的

本年度新たに導入した企業訪問プログラムの目的は、語学・文化学習にとどまらず、韓国社会やビジネスの現場に直接触れる機会を学生に提供し、社会理解およびキャリア意識の醸成を図る点にあった。研修を通して、学習者が韓国語で得た知識や経験を、社会の仕組みや仕事のあり方と結びつけて捉え直す契機をつくることを意図した。なお、企業訪問の導入は当初計画の段階から確定していたものではない。もともと本年度は、江華島平和展望台（강화도평화전망대）の見学を予定していたが、北朝鮮からの放射性物質流出に関する報道が出たことを受け、安全面を最優先として当該行程を取りやめる判断を行った。その後、島根県出雲市に業務で滞在していた NAVER 本社員を紹介してもらう機会があり、メールでの調整を経て、急遽 NAVER 本社への訪問を実施する方向へ計画を転換した経緯がある。この計画変更は偶発的な要素を含む一方で、教員側には以前から、短期研修の学びを「語学と文化」に限定せず、社会理解や職業理解に結びつく学習機会を取り入れたいという構想があった。今回の企業訪問は、その構想と状況的な機会が一致したことで実現し、研修プログラムに新たな学習要素を加える契機となった。

グローバル企業の職場環境や働き方を見学し、現地社員から説明を受ける経験は、学生に韓国の産業や職業観への具体的理解を促すとともに、自身の将来像を考える材料を提供し得る。また、急速に発展する韓国のハイテク産業に触れることは、学習者の視野を広げ、語学学習で培った力を社会でどのように活かし得るかを具体的にイメージする助けともなり得る。こうした企業訪問を研修に組み込むことで、本研修全体の学びを「語学と文化」から「社会とキャリア」へと拡張し、より総合的な教育効果を生み出すことを目指した。

6.2 訪問内容

研修の中盤で実施した NAVER 本社訪問では、ソウル近郊の NAVER 社屋において社内施設の見学と担当者による会社説明・質疑応答が行われた。学生たちは最先端技術を駆使した開放的で洗練されたオフィス環境に直に触れ、強い印象を受けた様子であった。実際、参加者からは「全体的に綺麗でした。また、テクノロジーの進歩を感じることができました。」「社員が自由に働けて、社内に病院があったり食堂のメニューが充実していたり働きたくないような職場だなと思いました。」といった声上がり、社内設備の充実度や自由度の高い職場風土に驚きと憧れが示された。オフィスフロアでは、何もない空間に可動式の壁を設置して必要に応じ会議室を生み出すレイアウトや、社員同士が自由にディスカッションできるオープンスペースなど、創造性を促す工夫が凝らされていた。また、社員用レストランの店舗が人気順で入れ替わるシステムや、社内コンビニで購入した商品をロボットが席まで届けてくれるサービスなど、日々の業務の中に遊び心と利便性を融合させた最

新の取り組みが紹介され、学生たちは「ロボットが自分の席まで運んでくれることに驚きました」と目を輝かせていた。さらに、説明ではNAVERが日本の地方自治体（島根県出雲市）と連携したプロジェクトに取り組んでいることも言及され、国内外の社会的ニーズを見据えて事業を展開している点が強調された。質疑応答の時間には、社内文化やキャリアパスに関する質問が出され、韓国トップ企業で働くことの魅力や厳しさについて率直なやり取りがなされた。全体を通じて、IT企業特有のオープンで先進的な職場の実情を自分たちの目で確かめ、日本の企業文化との共通点や相違点を肌で感じる貴重な機会となった。

6.3 学生の心理的変容

NAVER訪問後、学生たちのキャリア観や職場環境に対する意識には明確な変化が見られた。例えば、「IT企業はもっと社員の人パソコンと睨み合いながら黙々と作業をするイメージだったけど、開放的で自由な職場なので働きやすそうだなと思いました。」とのコメントが示すように、訪問前に抱いていたIT業界の固定観念が覆され、職場の雰囲気に対する認識が大きく更新された。また、「日本も韓国も、会社で社員が求めている環境は同じだと思ったから、日本の会社でも導入してほしい設備はたくさんあった。」という感想からは、快適で先進的なオフィス環境の重要性に気づき、日本企業の職場環境についても考えを巡らせる契機となったことがうかがえる。さらに、グローバル企業を肌で感じたことで語学力の必要性を再認識する学生も多く、「やはり英語を勉強することはとても重要だと感じた」と、国際社会で活躍するためのスキル習得に意欲を示す声も聞かれた。

自身の将来に対する視野も大きく広がった。実際に訪問を経験したことで、「IT企業も就職の視野に入れたいと思うようになった」「韓国と関係のある会社を調べて、将来韓国でも働きたいと思った」といった声が寄せられ、これまで考えていなかった業界や海外で働く選択肢を現実的に捉え始めた学生もいた。「就職活動を進める上での選択肢が広がったことと、職場の環境の大切さを改めて実感しました」という振り返りが象徴するように、職場環境や企業文化まで含めた新たな観点からキャリアを考えるようになった点は、本訪問がもたらした大きな心理的変容であると言える。また、訪問をきっかけに今後の具体的な行動についても前向きな言及が見られた。「韓国語だけでなく、語学の勉強は変わらず進めていきたいなと思いました。」と語学学習への継続意欲を高めたり、「会社のことは実際に行ってみないと分からないことばかりなので、自分の目で見て体験することが大事だなと思いました。」と今後の企業研究やインターンシップ参加に積極的な姿勢を示したりするなど、学生たちは研修後の自らの行動計画にまで踏み込んだコメントを残している。企業訪問の経験を通じ、学生が将来に向けて主体的に動き出す契機が形成された点は、本プログラムの大きな成果の一つと評価できよう。

7. 教育的成果の総合分析

7.1 語学面の成果

語学力の向上について、多くの学生が研修の効果を実感している。アンケートには「韓

国語の語学力が全体的に伸びた。特に記述力は授業での練習のおかげで伸びが大きかったと感じる。」との声が寄せられ、教室内での指導により読み書き能力が向上したことが示唆された。授業は参加学生の習熟度に合わせレベル別を実施され、双方向型の活動を多く取り入れたことで効果的な学習環境が構築されたようである。実際、「ペアワークやグループワークが多かったので、楽しい雰囲気韓国語の学習ができました。」「自分たちのレベルに合わせて授業内容を変更してくださった」といった学生のコメントから、学生が積極的かつ安心して参加できる授業デザインが学習意欲と理解度を高めたことが読み取れる。一方、現地での日常生活や交流活動を通じた「生きた韓国語」の使用経験により、実践的なコミュニケーション能力も一定程度向上した。ある学生は「研修の最初の頃に比べて、韓国語が分からなくても自分の気持ちを伝えようと、身振り手振りや知っている単語を駆使して諦めずに伝えようとするコミュニケーション能力が身についた。」と述べており、不完全な言語知識の中でも伝達を試みる積極性と対応力が育まれたことがわかる。また、「企業訪問などで韓国語がわからず内容が理解できなかったときがあったから、韓国語の勉強をもっとしようと思った」と、自らの課題をバネに一層の自己学習に意欲を見せる声もあった。こうした経験を通じて、学生たちは韓国語で意思疎通を図ることへの自信を深めるとともに、さらなる語学力向上への動機づけを得たと考えられる。さらに、「韓国語の勉強において、音を大切に作る習慣がついたように感じます。連音化などのルールを体で感じるイメージをちょっと習得できた気がします。」という記述も見られ、授業や現地での多様な音声入力に触れる中で発音や音韻に関する理解が深まったこともうかがえる。

7.2 異文化理解

異文化理解と適応力の面でも、参加学生には複数の変化が確認された。まず、海外で生活することへの心理的負担は研修を通して軽減され、「海外への恐怖心が減りました。言語も文化も違うから少し不安だったけど韓国で行った先の方はみんな優しく、言葉がペラペラでなくても楽しむことができました。」という記述に示されるように、言語面の不十分さを抱えながらも現地でのやり取りを肯定的に捉え直している。あわせて、日常場面で自ら動いて困難を解消する力も表れており、「行動力や挑戦する力が身についたこと」「乗る電車がわからなかったらすぐに周りの人に聞くことができるようになった」といったコメントは、環境への働きかけ（質問・探索・試行）を通じた適応の進展を示す。さらに、研修前は新しい場所に向かうことに消極的だった学生が、「研修に行ってから新しい場所に行くことに少しわくわくするようになり、いつもと違う場所に行くことへの苦手意識が減りました」と述べている点は、未知への回避が「関心・挑戦」へ移行したことを端的に表している。加えて、研修経験を他者との関係へ接続しようとする姿勢も見られた。例えば、「研修中は現地の方々がたくさん助けてもらったので、日本に来ている海外の人（主に学生）に対して何らかの形でサポートできたらいいなと思っています。」という記述は、受け取った支援を今後の行動に変換しようとする意識を示す。また、「すでに交流のある島大の韓国人留学生たちとの交流を卒業後も続けたい」と、関係性の継続を志向する声や、「もっ

と多くの島大生に韓国研修に参加してほしいと思うので、後輩たちを積極的に誘いたいです。」と経験の共有・拡張を目指す声も確認された。これらの記述は、異文化理解が知識の獲得にとどまらず、自己の捉え直しや行動選択の変化として現れ得ることを示唆する。実際、短期海外留学の体験記を計量テキスト分析した渡邊・久保田・倉増（2018）は、異文化環境での生活や対人接触を契機に自国・自己を省察し、帰国後の意識変化を報告する学生が多数に及ぶことを示している。本研究の参加学生に見られた「不安の軽減」「主体的な問題解決」「関係性の継続・拡張への志向」は、短期滞在であっても異文化体験が態度・行動面の変容を促し得るという同研究の示唆と重ねて位置づけられる。

7.3 キャリア意識・グローバル視点

キャリア意識やグローバルな視点の面でも、研修の効果は顕著であった。企業訪問を含む多角的な体験を経て、自身の将来を国際的なスケールで捉え直す学生が増えている。実際、「IT企業も就職の視野に入れたいと思うようになった」「韓国と関係のある会社を調べて、将来韓国でも働きたいと思った」といった声が寄せられ、海外の企業や異業種で働くことを現実的な選択肢として検討し始めた学生が見受けられた。また、グローバル社会で活躍するために必要な資質についての気づきも得られており、「英語や韓国語などの言語をある程度勉強しておくことでキャリアの幅が広がるかなと思った」とのコメントに示されるように、語学力や異文化適応力の重要性を改めて認識する契機となった。さらに、「人々の毎日の暮らしを支えるサービスに関連する仕事について興味生まれ、志望業界の幅を広げたいです。」という自由記述が象徴するように、研修を通じて得た経験から社会への貢献やグローバルな視野で物事を捉える姿勢が芽生えた学生もいる。これらの変化から、本研修は学生のキャリア観に国際的な広がりをもたらし、自身の将来設計を多面的に考察するきっかけを提供したと言える。

8. 課題と今後の展望

本研修に対する参加学生の満足度は総じて高く、来年度以降も継続してほしい活動として「現地大学生との交流」「韓国料理体験」「伝統工芸体験」「韓服体験」「K-POPダンス体験」「NANTA観覧」「ロッテワールド」「釜山研修」など、本年度実施した多くの活動が挙げられた（「全部です！」との回答も見られた）。このことは、交流・文化体験・社会理解（企業訪問）を関連づけた本年度の設計が、学習者の関心に一定程度応答できていたことを示している。

一方で、改善点としてまず検討すべきは日程設計（活動密度）である。自由記述には「ハードスケジュールなので、気持ち活動を減らしてもいいかもしれない」「行くところがなくなってたから2～3日短くてもいい」といった負担感に関する意見がある一方、「授業回数もしっかりあるからこそ、休みの日も楽しかったりしたので、今具合のいい感じの詰まったスケジュールが続いてもいい」といった肯定的意見もあり、学生によって受け止めが分かれた。したがって今後は、学習機会の確保と疲労の蓄積を両立させる観点から、休息日

(調整日)の配置や、移動負担を抑える運営面の工夫を具体的に検討する必要がある。実際、「韓国に到着した次の日から外国語大学の授業が開始し、緊張や不安がありました。到着後は韓国での生活に慣れる時間をもう少し確保していただくと、参加する学生が万全の状態韓国語学習に励めると思います。」という要望は、研修開始直後の心理的・身体的負担を示唆している。

次に、交流活動については、本年度は回数を2回から4回へ増やし、事前交流も導入したが、なお「もう少し現地大学生との交流を増やしてほしい」という声が見られた。交流は語学運用の機会であると同時に、同年代との対話を通じた異文化理解の契機でもあるため、今後もマッチング方法や活動設計の改善を継続する必要がある。ただし、回数の単純増ではなく、学習効果と負担のバランスを踏まえ、活動の質(目的の明確化、事前準備、振り返り設計)を中心に再点検することが重要である。さらに、新規活動の提案として、漢江の噴水ショー観覧、北朝鮮が望める場所(DMZ等)の訪問、韓屋宿泊体験などが挙げられた。これらは学習価値が期待できる一方で、安全面・費用面・移動時間の検討が不可欠であり、導入可能性を慎重に評価した上で、代替案も含めて検討する必要がある。

加えて本年度は、研修実施中に参加者への個別インタビューを行い、運営改善に直結する示唆を得た。これらは事後アンケートとは異なり、「進行中の負担感」や「生活面の困りごと」が具体的に把握できる点に特徴があり、次年度の改善に活用できる。

8.1 研修実施中インタビューに基づく運営改善案

研修実施中インタビュー⁵で得られた主な改善案は以下のとおりである。

1. 入国翌日は授業を入れない:生活環境に慣れる時間を確保し、心理的負担を軽減する。
2. 往復ともに貸切バスを手配する:空港～宿舎等の移動負担を抑え、疲労の蓄積を防ぐ。
3. 平日午後に休息日(自由時間)を設定する:学習と休息のリズムを整え、活動の質を維持する。
4. 学生交流会は3回程度にする:回数と負担のバランスをとりつつ、交流の質を高める。
*あわせて、先方への依頼事項として協力学生として女子学生の募集を希望する要望も挙がった。
5. 研修期間は14泊15日程度を目安に再検討する:日程の過度な長期化を避ける。
6. 授業期間は1週間程度を目安にする:授業負担と体験活動の配分を再調整する。
7. 釜山滞在は同一ホテルに統一し、全員でまとまって移動する:運営を旅行会社に委託するなどして、安全管理と移動の円滑化を図る⁶。

⁵ いずれも参加者の声を基に教員が整理した項目であり、次年度計画の検討材料として位置づける。

⁶ 昨今の円安により研修経費が増加していたため、これまで釜山研修は自由参加とし、高速列車(KTX)のチケットとホテル予約は旅行会社に手配を依頼してきた。さらに経費を抑える目的で、今年度は宿泊先を同一ホテルに限定したうえで、手配は各自で行える形に変更した。その結果、ソウルに残る学生と釜山へ移動する学生に分かれたことで、安全管理の面で課題が残った。そこで来年度は、釜山研修を全員参加に切り替え、KTXのチケットのみ旅行会社に手配を依頼し、ホテルは今年度と同様に各自で予約できる方式を維持する方針である。

8. 航空券は今年度同様、各自で購入（手配）する：費用面・日程面の柔軟性を確保する⁷。
9. 研修スケジュール表と非常連絡網は保護者にも共有する：情報共有を徹底し、安心感を高める。
10. 企業訪問時のお土産は事前に国際担当部署と協議し、準備方法を統一する：当日の負担や手配の混乱を避ける。
11. 生活面の支援情報を事前に共有する：日本食が恋しくなるという声が多かったため、「インスタント味噌汁」「ふりかけ」等の持参を案内する。納豆は高価だが韓国でも購入可能であること、サラダ類はコンビニでは品数が限られる一方でロツテマート大型店で入手しやすいこと等を、事前研修で情報提供する。

以上のように、次年度に向けては「教育効果を高める改善（交流・文化体験・社会理解）」に加え、「運営負担を下げ、学習に集中できる環境を整える改善（移動・休息・情報共有・生活支援）」を両輪として整理する必要がある。今後は、事後アンケートと実施中インタビューの双方を用い、改善の優先順位を明確にした上で、プログラム全体を再設計していきたい。

9. まとめ

本稿では、昨年度の学生フィードバックを受けて改善を施した令和7年度韓国夏季短期研修プログラムについて、内容と教育的成果を検討した。本年度は、①現地大学生との交流活動の拡充（事前交流を含む）、②文化体験の多様化、③NAVER 本社への企業訪問導入を柱として、語学学習に加えて異文化理解およびキャリア形成まで視野に入れた学習機会を構成した。

研修後アンケートの自由記述からは、授業の工夫（レベル別編成、ペア・グループ活動）により読み書き・記述面の伸長が自覚されていること、交流や日常生活を通じて「伝わるように工夫して話す」姿勢が育まれたことが示唆された。また、異文化環境での行動経験を通じて、不安の軽減や主体性の伸長が複数の学生によって言語化されており、異文化理解が知識の獲得にとどまらず態度・行動面の変容にもつながった点が確認できた。さらに企業訪問は、IT企業や職場環境に対する固定観念を更新し、語学学習の必要性を再認識させるとともに、進路選択の視野を広げる契機となった。短期研修がキャリア意識の形成に寄与し得ることは先行研究でも指摘されており（佐藤、2025）、本研修においても同様の方向性が示唆された。

一方で、運営面では日程の密度や渡航直後の負担、移動・生活面のストレスなど、改善の余地が残された。特に本年度は、研修実施中の個別インタビューを通じて、休息日の設定、移動手段の統一、授業期間・研修日数の再検討、保護者への情報共有、生活支援情報

⁷ 米子—仁川間の航空便は1日1便に限られるため、今年度は費用を抑える目的で、航空券を各自で予約できる形に変更した。結果として、旅行会社に手配を依頼する場合よりも費用差が大きくなったため、来年度も今年度と同様に、各自で予約する方式を継続する方針である。

の提示など、次年度計画に直結する具体的提案が得られた。今後は、事後アンケートと実施中インタビューの双方を活用しながら、改善点を明確化し、計画（Plan）—実行（Do）—点検（Check）—改善（Act）の循環を通じてプログラムの質を継続的に高めていきたい。

参考文献

- 林河運（2025）「韓国における夏季短期研修プログラムの実践報告」『島根大学外国語教育センタージャーナル』第20号，93-107.
- 佐藤幸代（2025）「短期語学留学の経験をとおして学生のキャリア意識はどのように変化するか」『南山大学アカデミア. 文学・語学編』（117），253-275.
- チャン・ヒョクチン（2025）「[イシュー] 政府，『北朝鮮ウラン工場廃水』関連の合同調査に着手」KBS ニュース，2025年7月3日，<https://news.kbs.co.kr/news/pc/view/view.do?ncd=8294997>（2026年2月6日閲覧）.
- 野水勉・新田功（2014）「海外留学することの意義—平成23・24年度留学生交流支援制度（短期派遣・ショートビジット）追加アンケート調査分析結果から—」『留学交流』2014年7月号（Vol.40），（独）日本学生支援機構，20-39.
https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/_icsFiles/afieldfile/2021/02/18/201407nomizunitta.pdf（2025年12月1日習得）.
- 山本大・原怜来・北村勝朗（2025）「短期海外実地研修の教育的効果」『スポーツ科学研究』第9集，日本大学スポーツ科学部，7-14.
- 渡邊尚孝・久保田真吾・倉増泰弘（2018）「短期海外留学の教育効果に関する質的研究—異文化体験の学習過程を示す記述を中心として—」『子ども未来学研究』12巻，梅光学院大学子ども学部，39-51.